

## 思考表現に関する認知言語学的分析-事態把握の観点から-

著者	林 佩怡
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第114号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/51119">http://hdl.handle.net/10097/51119</a>

LIN  
林

PEI  
佩

YI  
怡

学位の種類 博士（国際文化）

学位記番号 国博 第 114 号

学位授与年月日 平成22年 3 月25日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程）  
国際文化交流論専攻

学位論文題目 思考表現に関する認知言語学的分析  
－事態把握の観点から－

論文審査委員 （主査）

教授 上 原 聡

教授 佐 藤 勢紀子

准教授 福 島 悦 子

准教授 ナロック ハイコ

## 論文内容の要旨

### 1. 研究目的

本研究は、筆者自身が日本語の勉強を始めて以来、ずっと抱え続けていた「ト思う」と「ト思っている」の使い分け方は何かという疑問が出発点となっている。

一人称主体の発話時現在の思考認識を表せるのは、基本形の「ト思う」のみならずテイル形の「ト思っている」であることから両者は同じ機能を有すると考えられるが、両形式における意味的違いは何だろうか。

- (1) （私は） 彼が正しい と思います 。
- (2) （私は） 彼が正しい と思っています 。

日本語教育において、両形式の違いは主にアスペクトの観点から説明されることが多いため、学習者にはその違いが単に持続性や現在性の問題として理解され、誤用とまでは言えなくてもかなり

不自然な表現がよく見られる。

(3) ?この車はすごくいい と思っています。

(4) ?春休みはすごくいい休みだった と思っています。

(LARP J0531020)

一人称主語の「思う」と「思っている」の差異を、主に継続的な思考であるか否かというアスペクト的な観点だけでは説明できないものがあることは、学習者の使用例によって示されている。

日本語では、一般の動作動詞（外的運動動詞）に比べ、人間の内的状態を表す動詞は遥かに複雑な性格を持ち、独自の文法的現象がある。中でも「思う」は人称制限、モダリティ、アスペクト、語用問題など様々な要素と絡み合っており、かなり複雑な性格を持つ動詞である。「(ト) 思う」の問題をめぐるのは、語彙的特徴、人称制限、モダリティ、語用論など日本語動詞の長年の研究のなかで多方面に渡って考察されてきたが、テイル形の「ト思っている」については、「ト思う」を比較対象とした言及に止まり深く考察されていない。「ト思う」と「ト思っている」の違いを明らかにするには、「ト思う」だけでなく「ト思っている」の意味機能についての探求も同様に重要であると考えられる。

杉本（1996：156-157）では、「ト思う」だけで現在時の動きを十分に表せるわけであるから、「ト思っている」がいわゆる現在進行形を現すことはめったにない。心的作用を表す動詞の場合、その動きが客観的に捉えにくく、「テイル」がついているから「継続相」とも簡単に断定できないと指摘されている。これによって、本研究は「ト思う」と「ト思っている」間において、両者の違いが純粹に時間継続性の有無のみにあるのではなく、ル形ーテイル形というアスペクトの対立によっても意味的な差異や命題内容の制限問題が生じること、さらに語用論的效果により違いが生じること考える。

以上の問題意識に立ち、本研究では、言語表現の意味は発話主体による事態の捉え方による解釈であり、言語形式が違えば意味も違う、という認知言語学の基本的姿勢をとり、認知言語学において極めて重要な概念の1つである「事態把握」（池上 2003, 2004, 2009；中村 2004）を理論の枠組みとする。思考表現に関するテイルの意味は継続性を示すだけでなく、柳沢（1992, 1994）が提唱する報告性の意味という主張を援用し、一人称における「ト思う」と「ト思っている」の違いを解明することを課題目的とする。

## 2. 本論文の構成と分析結果

第1章「序論」では、研究の目的、研究の方法を紹介し、第2章「認知言語学における事態把握に関する諸概念」では、本研究の理論的枠組み、すなわち、具体的な事象についての分析考察を行

うための前提となっている認知言語学における事態把握に関連する諸概念を概説する。

なお、「事態把握」とは、話し手がある出来事をどのように認識し、どのように捉えるかということである。「事態把握」というスタンスには「主観的把握」(subjective construal)と「客観的把握」(objective construal)という2つの対比的な概念があり、次のように規定されている(池上2009)。

#### (5) 事態把握における「主観的把握」と「客観的把握」

主観的把握：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

客観的把握：話者は問題の事態の外に自らの身を置き、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外に身をおいて、傍観者ないし観察者として客観的に(自己を含む)事態を把握する。

ある事態を把握する際に、主観的把握と客観的把握のいずれが取られるかは、言語によって異なり、同じ言語においても話者の認知の仕方や心的態度によって異なる場合がある。

第3章『「トと思う」に関する先行研究およびその問題点』では、「トと思う」と「ト思っている」を論じた先行諸研究を取り上げ重点的に概観し、その研究成果を紹介しつつ問題点を指摘し、本研究の課題をより明確に提示する。

そして、第4章では「ト思っている」の意味を究明するために、テイルの意味機能について議論し、第5章では、日本語母語話者の使用実態について調査することで、「トと思う」と「ト思っている」の使用傾向を導き出し、第6章では、先行研究の問題点の解決を含め、「トと思う」と「ト思っている」の違いを事態把握の観点から考察を行い、体系的に説明することを試みる。なお、第4章から第6章までの考察内容と分析結果の要旨を各章ごとに以下に示す。

第4章「テイル形式の意味機能」では、テイル形の意味にアスペクト的な観点からだけでは説明しきれない「トと思う」と「ト思っている」のような意味表現があることから、テイルをアスペクト的な観点からは捉えずに、非アスペクト的な側面から情報伝達という発話機能で捉え、報告性の意味を持つことを論じた。

初めに、テイル形をアスペクト的な側面および非アスペクト的な側面から論じる先行研究を概観

したうえ、対話の状況において、内的情態動詞や動作動詞に関わらず、テイル形には一・二人称主語と共起しにくい現象が見られることから、ある種の人称制限があることが窺われ、アスペクトの意味がテイル形の役割のすべてではないことを指摘した。

次いで、テイル構文に関わる人称制限の問題を解決するに当たり、仁田（1991）による述べ立て文的な性格である現象描写文の特徴について、「話し手から聞き手への実効的な情報伝達である限り、その内容は、聞き手の知らない、あるいは充分了解していないものでなければならない（ibid: 79）」という知見を取り入れて解釈を試みた。すなわち、対話の場面において、話し手と聞き手お互いの外面に現われている様相に関する情報は、お互いが五感によって直接観察することが可能で確かめ合うことができる状況にあるため、伝達必要性の価値がない無意義な情報を敢えて言語化して相手に伝えることは、会話の原則に反し不自然に思われる。この観点を踏まえ、人称に関わるテイル構文は、このような語用論的な動機づけにより、（独話や話し手・聞き手が映っているビデオなどのような）特殊な状況を除けば普通の会話では、一・二人称には使用できないという人称の制約が存在する。

また、一人称主体のテイル表現は次の2つの場合に使用され则认为。1つは、話し手が自分の状況を確認し認識を修正する際の独話的な発話をする場合である。もう1つは、話し手が聞き手に対し、自分の状況を説明したり改めて主張したりするため、聞き手に伝達することを目的とする発話の場合である。従って、テイルの機能は、現在進行中・継続中の事態を表すアスペクト的な意味として働いているというよりも、報告性という発話機能が働いていると考えよう。

以上の考察を踏まえて、本研究では、テイル形には情報伝達、つまり報告性という発話機能があることを主張し、柳沢（1992）による報告性の基本機能「ある行為が自分以外に属するものであることを表示する点にある」という定義を取り入れ、テイルの機能を次のように新たに規定した。

(6) 本研究における報告性の機能の定義：

- a. 報告性の機能は基本的に、ある行為が自分以外に属するものであることを表示する点にあるが、一人称主体である話し手が観念的分裂による視点移行の認知過程を経て知覚・認識者である自分の視野の中に含まれる自己の行為を表示する場合にも適用される。
- b. 報告性の意味が成立するのは、聞き手が把握していないと思われる有意義な情報を伝達する場合である。

なお、話し手がテイル形式を用いて報告する際、その対象となる事態を観察してから心的操作を行い確実なものと認識し、事態を言語化して報告するというこの一連の動作には一定の時間の幅が必要とされる。つまり、事態を観察する時点から報告するまでの間、対象となる事態は継続してい

る状態であればならないのである。よって、テイルは、事態のある一時的な状態を捉えて報告する意味形式である。テイル形には、一時性・状態性というアスペクト的な意味側面があるだけでなく、報告性という伝達的な意味側面もあると考える。テイル形をアスペクト的な意味として捉える場合は、報告性の意味が弱まり背景化してしまう。逆に、テイル形の報告性が前景化する場合は、アスペクトの意味が退き背景化する。

テイルの報告性の機能は、「ナッテイマス/ナッテオリマス」形式にも現れる。フォーマルな場面によく使用される「ナッテイマス/ナッテオリマス」が報告性という情報伝達の機能と丁寧さの意味を持つ表現であることを指摘した。最後に、人称代名詞のテイル構文や、対人的配慮を必要とする場合、テイルのアスペクト的な意味が背景化してしまい、報告性の意味が前景化して現れると結論づけた。

第5章『「ト思う」と「ト思っている」の使用実態調査』では、「ト思う」と「ト思っている」がどのように使い分けられているかという使用実態と使用傾向を導き出し両形式の関係を明確にすることを目的とし、日本語母語話者のデータを使って調査を行い、一人称主体の「ト思う」と「ト思っている」が使用される場合の談話状況・文脈的条件を視野に入れて考察した。

まず、調査するに当たって2種類の分析データを使用した。一つは、『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話1（日本語母語話者同士の会話）』（以下、自然会話データと称する）に所収されている親疎関係の異なる20代女性学生の雑談コーパスである。その内訳は、親しい友人同士ペア（12組）と初対面同士ペア（11組）合計23組の談話で、発話時間482分5秒の会話資料である。もう1つは、ドラマのシナリオ（以下、シナリオデータと称する）で合計9本68話のものである。シナリオに用いられる会話表現は、日常的な会話とは些か性質が異なり会話の自然さという点でレベルが下がることが見受けられるかもしれない。しかし、「ト思う」と「ト思っている」の使用実態をより広範に把握するため、シナリオも分析データとして採用することにした。

次に、「ト思う」と「ト思っている」の意味用法について、両形式表現の用法をその思考認識の内容から大きく「意見判断表示用法」と「希望決意表示用法」に分けることにした。これは、本研究が考える「ある情報を確実な客観的事実として提示するのではなく、話し手の思考作用を経て得られた個人的な思考認識を表示する」という「ト思う」本来の意味に基づいた分類である。

分析データに現れた「ト思う」と「ト思っている」表現を本研究が規定した2つの用法別に分類し、結果を表1にまとめて示す。自然会話データの調査結果によれば、会話同士の親疎関係による使用変化はあまり見られず、親疎という要因が「ト思う」と「ト思っている」の使用に対し影響を及ぼさなかったと考えられるため、結果をまとめて示す。

表1. 一人称における「ト思う」と「ト思っている」の使用

形式別 \ 用法別		意見判断表示		希望意志表示		総計
ト思う	自然会話	142	96.6%	5	3.4%	165
	シナリオ	165	92.7%	13	7.3%	178
	小計	307	94.5%	18	5.5%	325
ト思っている	自然会話	7	29.2%	17	70.8%	24
	シナリオ	9	39.1%	14	60.9%	23
	小計	16	34.0%	31	66.0%	47

表1に示されているように、一人称主体の使用において、「ト思う」の使用回数が「ト思っている」よりも遥かに上回ることが示されている。すなわち、日本語では一人称主体の思考を表す際、「ト思う」も「ト思っている」も使用可能であるが、「ト思う」のほうが典型的な使用で無標の表現であるのに対し、「ト思っている」は有標の表現である。

意味用法別の調査結果は次のようである。まず、分析データの種類に関わらず、「ト思う」の使用は圧倒的に「意見判断表示用法」に集中するのに対し、「ト思っている」は主に「希望意志表示用法」に傾くという異なる使用傾向が見られる。すなわち、「ト思う」形式は、主に一人称主体による意見、判断や評価といった内容の思考を表す場合に使用される表現であるが、「ト思っている」形式は、主に話し手の内心に存在する希望や意志といったものを対象とする表現である。

次に、意味用法別で「ト思う」と「ト思っている」の使用特徴を分析した。「意見判断表示用法」の使用特徴として、日本語では、通常話し手が対象事態に対する自分の意見・判断・評価を述べる場合、事態を直接に捉える発話場面に密着する「ト思う」形式を選択する。しかし、対象事態が話し手自身の場合や、語用的な理由で事態を直接に捉えない場合、話し手は一時的に自分自身を客体として扱い、間接的な思考認識を表す「ト思っている」を使用することになる。この考察結果は、一人称主体における「ト思う」と「ト思っている」の違いが、単にアスペクトの対立による使い分けではないことを示唆している。

「希望意志表示用法」については、「ト思う」による「希望意志表示用法」の用例をその談話の流れと文脈をもとに分析した結果、「聞き手の協力要請タイプ」、および、「自己完結タイプ」の2タイプに大きく分けることができる。「聞き手の協力要請タイプ」は、話し手がある行動の遂行に対し希望意思を有するが、事態の成立に関する決定権が話し手にはない場合、又は話し手だけでは事態を決定しかねない場合に、相手の許可や理解を要請するため、話し手は個人の意志要望をそのままストレートに表出するのではなく、伝達性のある「ト思う」を付加して相手に提示する表現であ

り、(7) がその例である。

- (7) 中野課長「政務官、今夜政務官歓迎の食事会を持ちたい と思う のですが、ご希望のお店や食べたいものがございましたらお聞かせいただけませんか？」

(レッツ・ゴー永田町 8)

「聞き手の協力要請タイプ」では、「ト思う」を「ト思っている」に置き換えた途端、本来の臨場感が希薄になり、同じ土俵にいる相手に対する働きかけの機能が失われ、話し手が単なる個人の願望や思考態度を述べている印象を与え、発話場面に適ない表現になるため、両形式の置換が不可と考えられる。このことは、「ト思う」は事態に直接に関わる臨場的な思考形式であり、「ト思っている」は事態に直接に関わっておらず脱現場的な思考を表すことを示唆している。

「自己完結タイプ」の表現は、話し手が言及する事態に聞き手の参与を不要とする点において「聞き手の協力要請タイプ」と対照的な位置にある。話し手が発話時に存在する自分の内面の希望意志を提示したとしても、その事態が成立するか否かは話し手側の問題であり、聞き手に対し事態成立への参与を要求しないものである。また、「自己完結タイプ」は、基本的に「ト思う」を「ト思っている」に置き換えられるが、置き換えた場合は意味の変化が生じる。

- (8) ひとみ「(頷き) 私は、岸本さんが犯人だと疑ってたの。だから事件が起きてから連絡を取らなかった。でも、犯人は、赤い帽子の女……………」

飛 鳥「……………」

ひとみ「許してくれるかどうか判らないけど、彼に会いに行こう と思う」

(スチュワーデス刑事 4)

「希望意志表示用法」の場合、「ト思う」が、話し手が発話時の場面において自分の完結した確たる決意願望を表出しているのに対し、「ト思っている」は、話し手の以前から発話時においても継続している未完結な希望意志、つまり話し手が内心に持っている予定・計画・考え方といったものを表している。

以上の考察から、「ト思っている」が使用される場合、話し手が提示した発話内容は、発話場面や話題される事態にとらわれず、グラウンドを離れて現場に依存しない個人情報表示である。よって、「ト思っている」表現は、発話場面に密着し聞き手との事態共有を必要条件とする命題内容と共起しにくいと考えられる。

最後に、「ト思う」表現は必ずしも一人称主体としか共起しないのではなく、一人称以外の主体



との共起も可能であることが調査によって明らかになった。一人称以外の主体の場合、「ト思う」は命題内容の一部になっており、文の意味は思考主体の現在の思考状態を表さず、普遍的思考認識や当然の帰結や事物の属性といった時間を超越した事柄を表す。端的に言えば、「ト思う」が人称制限を受けるのは、思考主体の現在の思考状態を表すいわゆる状態動詞としての働きをするときのみである。

第6章「事態把握による『ト思う』と『ト思っている』の考察」では、前章で行われたデータ調査の結果を踏まえたうえ、分析データに出現しなかった表現を、筆者がインターネット、新聞記事、小説などから採集してきた用例を用いて、認知言語学による事態把握の観点から、一人称主体が発話時における思考認識を表す「ト思う」形式と「ト思っている」形式との意味的違いを明らかにし、体系的に説明することを目的に考察を行った。

日本語では、本来主観的な把握をとる傾向にあるため、話し手自身の思考を述べる場合無標の「ト思う」が主に選択されるが、何らかの理由で自分の思考認識を敢えて他人のもののように客体化して捉える場合、話し手は主に三人称の思考を表す「ト思っている」を用いて表現することがある。その際、話し手である認知主体が、一時的に観念的な自己分裂・自己他者化という認知的な操作を通して認知の視点を移行し、自分自身の認識思考を客体として捉えるという客観的把握の認知態度をとっている。そのため、本来「ある行為が自分以外に属するものであることを表示する（柳沢1992）」という報告性の基本に反する状況においても、報告形式であるテイルを使用することが可能となる。このことは次の例をもって示す。

- (9) (略) …自分で頼んで食べるという満足感…そして、値段は、「時価」…食べ終わったときに、いくらになるのか計算しながら…頭の中で、金額にあわせて、「おいしい」「おいしい」といわせる自分がいた。高いから「おいしい」と思っている。しかし、ホントにおいしい寿司は、サバだった。  
( <http://www.geocities.jp/xinrenshanghai/food18.html> )

「ト思う」は、一人称主語にしか使えないことから、発話主体の主観的な視点が明白に刻印されているが、「ト思っている」には人称制限がなく主語が一人称にも三人称にもなれるため、発話主体の視点を取り込まれていない。よって、言語表現において、「ト思う」では、基本的に思考主体（＝発話主体）が明示されないが、「ト思っている」では、思考主体（発話主体とは限らない）が明示されることが多く見られる。

主観的把握の「ト思う」は事態を直接に捉え、思考主体の存在が思考主体（＝発話主体）の視野に入らないため、表現には思考主体の存在が含意されないのに対し、客観的把握の「ト思っている」には、一人称主体の場合、思考主体（＝発話主体）が観察の客体となっているため、表現には思考

主体の存在が必然的に内在化している。よって、「ト思う」は出来事・事態に対する思考認識を表し、「ト思っている」は思考主体の思考態度に対する思考認識を表す。つまり、「ト思う」は「対事的」な表現で「ト思っている」は「対人的」（思考主体中心）な表現である。

自己客体化という認知メカニズムが内在化している「ト思っている」が表す情報の元は認知主体自身の内的世界における認識である。この「自己の内的世界の認識」というスキーマ的な意味に基づく「ト思っている」が表している情報内容は、すなわち「自己限定の思考認識」（10）である。

- （10）私の中では、「勉強」は、基本的には自分の外側にある事実、知識などを、自分の中に取り入れる作業だ と思っています。（<http://www.nanzan-u.ac.jp/~urakami/in.html>）

この基本的な意味用法から、「一般論と相違する可能性のある認識」（11）、「現実と相違する可能性のある認識」（12）、「現実と異なる認識」（13）といったような意味用法が次第に拡張していく。

- （11）一家が望みを託しているのが、法務大臣の裁量で日本に残る資格を与える「在留特別許可」。森法務大臣は14日朝の会見で、「一般論としては強制送還もやむをえない」としたうえで、こう述べました。「個別のケースでいろいろ事情をしん酌してですね、人道的配慮を加えることも必要 と思っている」<sup>1</sup>（森英介法相）

（[http://news.tbs.co.jp/20081114/newseye/tbs\\_newseye3994192.html](http://news.tbs.co.jp/20081114/newseye/tbs_newseye3994192.html)）

- （12）大学でものすごく刺激的な友だちに会って。私はその人を「人生の師匠」だ と思っているのですが、大学も何回か入り直してっていう、ものすごいアクティブな人がいて。

（『なるほどの対話』）

- （13）私ね、その子は萌と私の子供だと思っているの。考えてみたら、お母さんがふたりいるなんて、なんてラッキーな子なのかしら。それも、こんな美人のお母さんなのよ。（『肩ごしの恋人』）

これらの意味用法によって、「ト思っている」表現には様々な連続的な語用効果が生ずる。事態を客観的・間接的に捉える「ト思っている」から、話し手の内的世界に限定される思考認識という中心意味軸をめぐる、「強調的な慎重態度」、「他者への配慮・丁寧さ」、「信念・思い込み」と

---

1 この例文はTBSニュースのHPに掲載された記事内容であるが、法務大臣の実際の発言は記事と多少異なる箇所があり、その映像を見て筆者による文字化したものは次のようである。「個別のケースでいろいろ事情をしん酌してですね、やっぱりその一、人道的配慮を加えるということも必要ではないかなと個人的 に思っています」。

いった意味効果が生み出されている。1つの「ト思っている」表現は、話し手の発話意図と聞き手の捉え方によって前景化する意味効果が異なり、解釈が変わるのである。すなわち、1つの「ト思っている」表現を、複数の意味効果に解釈することができる。そのため、一見対立するように思われる橋本（2003）が言う強い主張、信念という解釈と、足立（2000）の遠慮的なニュアンス、丁寧さを表すという説明と更に宮崎（1999）の「引用節内容の真偽値」による使用上の制限という主張を同時に存在させることが可能になる。

「ト思う」と「ト思っている」の違いをより分かりやすく明確に把握するため、情報事態の性質から、両形式の使い分け方を提案した。

情報事態の性質が、客観的事実から個人的意見へ変わるに従って、事実であると知っている「既知の世界」、事実かどうか分からない「未知の世界」、認知主体のみ事実とする「認知主体の世界」の3つに分けるが、これらはそれぞれ個別に存在せず明確な境界がない連続体を成している。「既知の世界」は話し手の思考意見を必要としない「客観的事実」「一般的通念」の情報である。「未知の世界」は、「ト思う」が使われる「断定保留」「主観的意見評価」を表す情報である。「認知主体の世界」は、「ト思っている」が使用される「自己限定の認識」「反現実認識」を表す情報である。

「断定保留」の事態では「ト思う」のみ、「反現実認識」の事態では「ト思っている」のみの使用となっている。また、事態の真偽に対する判断をする場合や、主観的な意見・評価・主張を表す場合は、基本的に「ト思う」が選ばれるが、話し手が事態を間接的に捉え個人の内的世界に限った認識として示す場合は「ト思っている」が使用されるのである。

このように、日本語母語話者は個人の思考認識を言語化する際、情報の性質や対人関係的な要因や語用論的な意味効果を考慮し、事態に対する捉え方を調整し「ト思う」と「ト思っている」を使い分けられていると考える。

### 3. 今後の課題

今後の課題としては、次の3点が挙げられる。

まず、本研究は、思考動詞「思う」の「ト思う」「ト思っている」形式に焦点を当て考察を行った。「思う」に近似する、「考える」、「信じる」、「感じる」などの内的状態動詞においては、どのような現象が見られるのか。その基本形とテイル形にはどのような意味的違いが見られ、「思う」の場合と同じ傾向・状況が観察されるかどうかを論じていきたい。

本研究が提案したテイルの報告性の意味がどこまで通用するかということに取り組みたい。テイル形にはアスペクトの観点からのみでは説明しきれないことがあるように、本研究が提案したテイルの報告性の意味がどこまで通用するか、またどのような言語現象において報告性の意味がより際立つかを重ねて考察する必要がある。

事態把握の観点から、「ト思う」の場合は「主観的把握」であり、「ト思っている」は「客観的把握」のスタンスになっていることが本研究で明らかにした。全てのテイル形は「客観的把握」になっているか、内的情態動詞に限ったことなのか、それとも「ト思う」の独特の現象なのかを究明する必要があると考える。

#### 参考文献（一部）

- 足立さゆり（2000）『『思う』と『思っている』について－日本語教育の視点から－』『国文白百合』31 白百合女子大学
- 池上嘉彦（2009）『人工知能学会第2種研究会 ことば工学会 資料 SIG-LSE-A803：ことば工学会（第31回）[シンポジウム] 主観性とパースペクティブ』（人工知能学会）pp.23-29
- 杉本和之（1996）『『思う』の統語的、語彙的特徴』『中京国文学』第15号 中京大学国文学会
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』くろしお出版
- 橋本直幸（2003）『『ト思っている』について－日本語母語話者と日本語学習者の使用傾向の違いから－』『日本語文法』3巻1号
- 宮崎和人（1999）「モダリティ論から見た『～と思う』」『待兼山論叢 日本学編』33 大阪大学文学会
- 柳沢浩哉（1992）「シテイル形式の報告性」『地域文化研究』第18巻 広島大学総合科学部紀要Ⅰ

## 論文審査結果の要旨

本論文の目的は、日本語教育において特に正しい用法の習得が難しいとされる思考動詞、その中で「思う」とそのテイル形式「思っている」の形を取り上げ、その高頻度で広範囲にわたる用法を認知言語学の事態把握の観点から分析し、コーパスの調査を通して実証的に解明することである。

思考動詞「思う」と「思っている」の使い分けに関する研究は、アスペクトの観点からの分析を中心に多く存在するが、本論文は、その1－3章において、先行研究のアスペクトの観点による説明だけでは扱い切れない数多くの用例が見られ、個人的な認識を表す文脈での用例を中心に存在するという重要な指摘をしている。また、事態把握の概念を中心に認知言語学の理論を簡潔にまとめ紹介し、本論文の分析の理論的基盤を明確に論述している。

続く4章では、「テイルの報告性」という主張を取り入れて認知言語学の事態把握の観点から「思う」の2表現の基本的意味を新たに定義し、先行研究で説明不可能であった用例も含めて体系的にその用法を解明することに成功している。

5章では、両形式の使用に関して、日本語母語話者の自然談話資料（自然会話コーパス及びドラマのシナリオの会話部分）を用いてその多様な用法の実態を整理・把握し、本論文の論点を検証し、またより明確にしている。前後の文脈を含めた詳細な分析を通じて、普遍的思考認識を表す表現では「思う」が人称制限なしで使用されることなど重要な発見をしており、母語話者の直感や内省的観察に基づいた従来の日本語学の分野の研究とは一線を画する新規性を示している。

6章ではさらにインターネットや新聞記事などから記者会見やインタビューでの「思っている」の用例を採集・分析し、先行研究の間で一見対立する指摘がなされている「話者の信念・思い込み」「聞き手への配慮・丁寧さ」といった語用論的效果についても論及している。語用論的效果は、発話者の発話意図と聞き手の捉え方による前景化・背景化の違いにもとづくものとして、「思っている」の意味・語用論的機能の体系的な説明を可能としている点は、日本語学および一般言語学の分野へのオリジナルな貢献として高く評価できる。

このように、本論文は執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。